

第40回全日本中学校陸上競技選手権大会 RESULTS

(8/19~22 愛知県・瑞穂公園陸上競技場)

<女子の部>

100m 山本 祐莉 予選 12:86 (+1.2)

100mJH 村上 瑞季 予選 14:66 (-0.2)

『東海で君が叶える夏の夢』この大会スローガンの元、日本全国から指定大会できびしい全国大会参加標準記録を突破した、およそ1700名の中学生のトップアスリートが尾張名古屋に集結した。今年はリレーメンバーを全国の大舞台に連れて来ることができなかったものの、東雲から100mの山本祐莉、100mJHの村上瑞季の2名の選手とともに参加することができた。毎年、必ず誰かが全国大会に出場してくれている。陸上に夢を持って頑張る選手との出会いがあるからこそで、あらためて感謝の気持ちでいっぱいになる。自分は大阪強化部の一員として、2日前に現地入り。2人は開会式のおこなわれる19日の昼前に到着。元気そうな2人の表情を見て安堵した。自分は監督会議に出席するために、入れ違うように競技場を後にして名古屋市公会堂に向かった。監督会議が終わってもう一度競技場に戻って来て、2人の調整練習を見るという慌たしさでした。

2人のここまでの道のりはある意味好対称である。山本祐莉は1年生のときから100mを12秒7台で走るエリート選手であった。1年のジュニアオリンピックではCクラス(1年生)100mで6位入賞している。1年の夏の奈良全中でも、準決勝で第3走者としてリレーを走っているのだから、彼女はこの3年の夏までの全中、ジュニアオリンピックと都合5回の全国大会すべてを経験しているのだ。今回の全国大会出場がかかる通信大会でも、一本目のレースで向かい風の中で全国大会参加標準記録を突破したのだから、きわめて順風満帆であった。そんな時ほど、



好事魔多し。その大会後に筋膜炎を発症。疲労骨折の一步手前ということで、リレーの全国大会出場のかかった中学選手権は痛み止めを飲みながら、何とか出場。そのあとはまったく走れず、ひたすら単調な速歩と体幹トレーニングを繰り返すだけの日々となった。スタートダッシュができるようになったのは現地入りする5日前のこと。何とか突貫工事で全国大会に間に合わせたのだ。

一方、村上瑞季は1年生のときはまったくの無名選手であった。1年生の400mリレーの選手にもなれなかったくらいで100m15秒台の、いわゆるどこの学校にもいる普

通の選手。1年の夏が過ぎた頃に、ハードルに取り組むようになった。当時は今よりもっと体が小さかったが、ハードルを怖がらないことと、接地がスムーズでクセのない走りをするのが目にとまり、強くなる選手という予感はしていた。何よりもサーキット練習に熱心に取り組むことができた。2年になっても順調に記録が伸びたが、大阪のハードルのレベルが高過ぎて、15秒8台の記録では学年別の大阪大会でも決勝に進むことはなかった。その選手が3年になって狙い通り通信大会の1本目で全国大会参加標準記録を突破。見事に全国切符を手にしたのである。この全国大会にいたるまでも、順調にトレーニングをこなすことができたのである。



競技場内では全国各地から集まった中学生のトップアスリートたちが、誇らしげに調整練習をおこなっていた。村上は全国大会独特の雰囲気によって圧倒されたのか、この日のハードルのアプローチ練習ではどこかぎこちない印象があった。村上にとっては無理のないことで、それでも開会式のあるこの日にそれを感じただけでも収穫である。彼女の本番レースは2日後である。もうひとりの山本は場数を踏んでいるだけあって、まったく物おじしない。堂々としている。スタプロをつけてのスタートダッシュを見てみると、これまた素晴らしい技術を見せつけた。もともとその技術には定評のある選手であったが、その技術にさらに磨きがかかって際だっているのだ。心の中で彼女の舞台度胸に舌を巻いた。

大会初日。現地入りして以来「名古屋は大阪に比べて涼しい」と感じていたが、この日になって「大阪と暑さは同じ！かなり暑い!!」と感じるようになった。2013年の夏は、記録的な暑さの夏であることを再確認した。アップ場へ調整練習に行くときに、宮崎県加納中（昨年度）の安在倫孝先生と再会した。安在先生は去年の冬に、東雲中学校の練習を見に来られた先生で「名古屋で再会できて嬉しいです」と互いに喜び合った。山本や村上にも気さくに声をかけてくださいました。

大会2日目。いよいよ山本の100m予選、村上の100mJH予選の日を迎えることになった。朝1番の6時よりホテルの朝食会場に飛びこんで、6時30分には車で競技場へ移動。7時からの競技場練習に突入した。村上のハードリングはここへ来て安定してきた。山本のスタートダッシュの技術も問題はないが、後はレース感もどっているかどうか。7月中旬の記録会で100mを走って以来、1ヶ月あまりのブランクがある。後半の走りがうまくまとめられるかどうかにはレースの出来がかかっている。

10時40分。100m女子予選7組。7レーンに山本が登場する。全部で10組あり各組の2着と3着以降の記録上位者4名が明日おこなわれる準決勝に進出することになる。



山本の持ちタイムは12秒55。ただし、昨年の記録を含めると12秒45が彼女の自己ベストとなる。また、今年は100mを11秒台で走るといった抜きんでた選手がいない。混戦模様である。ホームストレートは穏やかな追い風が吹いていて、申し分のないコンディションである。山本が万全でないことは百も承知しているのだが、どこかしら期待感を持って見ている自分が存在する。山本はこちらの気持ちを知ってか知らずか、いつもと同じ立ち振る舞いで、案の定、堂々としている。レース前におこなうスタートダッシュの動きも際だっている。「ON YOUR MARKS」スターターの低い声に、祈るような思いで息を呑んだ。8人の選手がピタッと止まると、スターターのピストルの閃光を合図にいっせいにきれいにスタートを切った。山本も前傾姿勢をきれいに保ちながら、加速局面を寸分狂いのないフォームで歩を刻んでいく。50mを過ぎてもほぼ横一線。山本にも十分チャンスがある。2レーンの選手がやや前が出る。山本はその選手に追いつこうとしたが、体の軸がブレた。ラスト20m後方に位置した場面で余力がもう残っていないことに気付いたのか、正確な接地も出来ず、いわゆる最後に失速したような状態でフィニッシュラインを駆け抜けた。山本は腰に手を当て下を向いた。首を横に振りながら、今度は宙を見つめるような仕草でトラックを後にした。電光のスコアボードで正式記録を確認した。12秒86で8着。追い風1.2m。完敗であった。

山本のレースを見届けた後、今度はすぐに村上を連れてアップ場へ向かった。暑さはこの日もきびしく、日光を浴びているだけで体力を消耗する。朝一番に1次アップを済ませているので、ハードルのアプローチ練習の確認だけに留めるようにした。村上はそもそも1台目の入りを得意とする選手である。レース前はわざとスタートラインより20cmほど前に両手をついて、2台目、3台目も正規のインターバルより1足長ずつ詰めながらアプローチ練習を繰り返す。いつもの儀式を丹念に済ませて、余裕を持って選手招集所へ向かう。いくつかのアドバイスをすると、彼女は「はい!」と返事をして、「お願いします!」と、ぺこりと頭を下げた選手招集所のテントの中へ消えていった。

12時35分競技開始。100mJH予選。全部で9組あり、各組の2着と3着以降の記録上位者6名が明日おこなわれる準決勝に進出することができる。この種目に標準記録を突破してエントリーされた大阪の選手は全国で最多の9名。(以下、兵庫8名、新潟6名、神奈川4名…と続く。不出場も16県ある) そうなると大阪の選手が各組にひとりずつ出てくるので、メインスタンドで見ても見応えがある。いよいよ4組、4レー



ンに村上が登場した。役員に促されて8人の選手がそれぞれにレーンに入り、スターティングブロックを調整する。そして、4台目、5台目のハードルが倒されていて、最初の3台のアプローチ練習が1本だけ許される。各選手が見事なハードリングを見せて、自分のスタート位置にもどるといよいよ出発のときを迎えることになる。村上のアプローチの技術に何ら問題はなく落ち着いているように見えた。運命のピストルが鳴った。1台目のハードルを素早く越える8人の選手たち。ハードル間8mをピッチを利かせて村上が走る。4台目あたり、ほぼ横一線であるが、わずかに村上ともうひとりの選手が前に出る。胸が高鳴った。「準決勝進出!？」と頭をよぎったが、そのあと村上が2人の選手に抜かされていた。(後になって聞くと、6~7台目あたりで隣の選手の手が当たったと言う。ハードルではまれにあることで、ハードリングの際に体の一部が触れていても、レーン内に体があれば失格とならない。)村上が倒れこむようにフィニッシュした。電光のスコアボードに正式記録が発表された。村上は4着14秒66。向かい風0.2m。彼女のベストタイムは14秒62なので、この大舞台でほぼ力を出し切ったことになる。ただ、この組の3着14秒56の選手がプラスで拾われて準決勝進出を果たしている。また追い風2.7mと条件が恵まれた2組がプラスで3人拾われている。準決勝進出できたはず…という思いの方が強くなった。

山本の5度目の全国大会(全中・ジュニアオリンピック)があっけなく終わってしまった。現状の中で健闘したことは認めるが、心のどこかで「自分はケガしていたから…」という思いがあったことも事実。何より毎日の練習の積み重ねができなかったので、レースの後半に心も体の軸もブレてしまった。日々の練習の鍛錬の中でこそ、勝負強さや勝ちに対する執着心、集中力が生まれることを再認識した。一方、村上にとっては初めての全国大会。全国のより高いステージで戦い切るイメージをもっと強く持たせるべきであり、それを徹底できなかった自分の甘さを恥じた。「人間は自分のイメージより、上に行くことはない」という言葉を何度も噛みしめた。

大阪は男子走り幅跳び、女子100mJH、女子四種競技の3種目で日本一、さらに7種目で入賞を果たし、今年も「大阪勢強し!」の印象を与えた。毎年のようにいつも試合でいっしょになる選手が日本一になっているのだ。日本一は簡単なことではないけれど、実は自分のすぐ身近なところに存在しているのだと思う。大会最終日、声を枯らしながら大阪の選手を応援する2人を見守りながら、彼女らのこれからの夢の旅路を思いやった。2人の夏の夢は叶わなかったが、必ず夢輝く日が来るはずだ。尾張名古屋の全中は終わりではなく始まり、再スタートの日となった。走ることに魅せられた2人の夢の続きを楽しみにしている。

